立教135年（昭和47年/1972年）6月4日号

燃える炎

妻の身上を生き節に
明るく勇む理髪屋さん

明るい平穏な家庭の中に突如として波紋が起こる。これまでの生活が明るく楽しければ楽しいほど、波紋の投げかける問題は大きい

妻に脳腫瘍の疑い

静岡県磐田郡の天竜川河口に近い豊田村はのどかな田園の中にあるが、近頃は科学技術文化の波が押し寄せてか村のカラーも変わりつつある。市川理容店はこの土地に三年まえに移転新築された。店主は市川勝巳さん(31)で、妻の恵美子さん(30)と二人で店を切り回している。散髪に励むその姿は、誰の目から見ても仲睦まじく、ほほえましい印象を与える。昼を過ぎて長男(三歳)と長女(六歳)の二児が加わると、店はいっそう賑やかさと明るさを増す。

静岡県豊田村の 市川さん夫妻

一見、平穏そうに見えるこの家庭も実は昨年夏から一家の信仰的試練ともいえる大問題に直面している。愛妻の恵美子さんに脳腫瘍の疑いがあるからだ。

ことの発端は、恵美子さんが「仕事中にときどき見えないところが生ずる」との訴えに、豊橋市の眼科の専門病院で診てもらったところ、病因は脳に由来するもので、〝脳腫瘍〟らしいと診断された。二人の驚きはあまりにも大きく、それは死の宣告に価するほどの響きさえもっていた。

食事は進まず、夜は眠れない数日が続いた。さらに実妹の出直が脳腫瘍であったことを知らされ、読みふけった医学書がかえって災いとなってか、ノイローゼ気味になっていた。

修養科に学んで

妻の苦しみが夫の苦しみとなり、方策のないままに悶々としていた勝巳さんは悲嘆の中から一つの解決の糸口を見つけた。それは自分達には親神様がついているではないか。どんな病気も心のたてかえによって必ず救けていただけると教えられている。病気は実は病気でなくて、救いたい、真の陽気ぐらしをさせたいとの親神の親心による手引きに他ならないのだ。

親里には憩の家もあることゆえ、妻のいやがる病院を一時やめて修養科に学ばせようと一大決心をした。二人が教理的に深い信仰を持ち合わせていたわけではないが、信仰という名の大きな波に身をゆだねることにしたのだ。

三カ月後、恵美子さんは帰ってきた。病気は完全に癒(い)えたわけではないが、驚くほどの精神的成長を見せていた。「お借りしている身体だから…」と借物の身を語り、暗いかげりはなかった。

布教所を開設して

いじらしいほどの妻の成人に勝巳さんは心を打たれ、夜のふけるのも忘れて信仰問答を交わすこともあった。これまでに避けていた死についての問題まで気楽に話ができるようになり、勝巳さんは恵美子さんに「誰もが日々死を目前にしているのだよ、それを気づかないだけだ。生きることとは、長さだけでなく内容に大きな意義があるのだよ」と諭すこともあった。死ありて生あり、最近では生活に充実さえ感じられるようになった二人は「生かしていただける間は最大限に有意義に過ごそう」と誓いをたてている。

そのようないきさつの中で今年三月七日、新一竜布教所（豊田村加茂西四九八の六、中野大部属、新竜東分所属）が誕生した。布教所長には母親の市川千代さん(54)が就任した。つづいて家業のかたわら地域活動にのりだし、四月には第二回目の陽気ぐらし講座「宗教と医学」を友人と開講した。店にはお客さんのために時報、みちのとも陽気、案内書、グラフなどを待合所の周囲に備えつけている。黒板の断片的な文字といい、店全体から天理教であることを真向うから打ち出し、節を生かした成人を果たすべく、頑張っている。

（静岡・掛…社友）

節を通して、一層の成人をはかる市川さん夫妻（中央右二人）

立教148年（昭和60年/1985年）2月17日号

児童図書を贈り続けて

――町の小学校と深まる友情――

静岡県豊田町加茂、理容業市川勝己さん（44歳）は自宅近くの町立豊田北部小学校（児童八百余人）に、児童用図書を五年余りも贈り続け、学校では図書室に特別コーナーを設け「市川文庫」と名付けて利用し感謝している。

市川さんはさる五十四年十一月に、母校でもある同校のPTA役員に選ばれ、毎月一回、図書室で開かれる会合に出席するうちに、「子供たちが立派に育ってくれれば」と、図書の寄贈を思い立った。

以来、毎月一回、欠かさず三～五冊ずつ寄贈し、五年余りで二百冊にもなった。市川さんのこうした児童思いの真実は、子供たちの心に広がり〝天理教のおじさん〟と慕われている。

夏のこどもおぢばがえりにも、ここ数年は次女・善乃さん（四年）の学級を中心に百人～百五十人が率先して参加し、子供たちの夏の楽しみの行事の一つとして定着するようになった。

市川さんは「公立の学校で、お道の図書が寄贈出来ないのが残念ですが、こうして毎月、学校とのつながりをもつことにより、教職員とも心の交流が出来、こどもおぢばがえりなども何の抵抗もなく、むしろ積極的に参加を促がす空気すらみえてきて、ありがたく思っています」と話していた。

立教156年（平成5年/1993年）10月31日号

ホタルの里を夢見て

静岡の市川さんが幼虫を寄付

〔静岡・西尾社友〕わが町をホタルの里にしたいと、磐田郡豊田町加茂で十年余りホタルの飼育、研究を続けている理髪業の市川勝己さん（52歳・新竜東分教会ようぼく）が、ヘイケボタルの幼虫約百匹を豊田町に寄付した。同町では、このホタルを役場玄関の水槽で飼育し、来年春に完成する町総合施設の一角に放す。

寄付された幼虫は、「自然に優しい町づくり」の委員も務める市川さんが、磐田市の北部などでホタルを採集し、そのホタルが産んだ卵をふ化させて一カ月半ほどたったもの。今後は町の職員が市川さんの指導、協力で飼育を続ける。順調に育てば、来春には幼虫は水から出て、六月ごろに成虫になる。

建設中の町総合施設の中に小川を作る計画もあり、同町ではこの小川にホタルの住みやすい環境が整備できれば、育てたホタルを放す考え。市川さんは「できれば、来年のこどもおぢばがえり期間中、教祖殿裏の北庭にこのホタルを放したい」と担当者と相談中という。

ホタルの幼虫を金原町長に手渡す市川さん

立教159年（平成8年/1996年）3月31日号

福祉事業に貢献

静岡の市川勝己さん

〔静岡・西尾社友〕静岡県磐田郡豊田町加茂の市川勝己さん（55歳・新龍東分教会教人＝写真）は、先ごろ行われた豊田町社会福祉大会の席上、地域の社会福祉事業への貢献で金原士朗大会会長（豊田町長）から表彰された。

理髪業を営む市川さんは長年、同町にある特別養護老人ホーム「豊田一空園」や身障者施設「緑ケ丘学園」で散髪ひのきしんを行うほか、目の不自由な人たちのガイドヘルパー、朗読ボランティア、さらに自宅周辺の通学路で児童の交通誘導も行っている。

立教162年（平成11年/1999年）8月8日号

光の乱舞に夢を託し

豊田ホタルの会会長
静岡・市川勝己さん

『中日新聞』がその活動を紹介

静岡県磐田郡豊田町加茂で「豊田ホタルの会」（二十五人）の会長を務める市川勝己さん（58歳・新龍東分教会教人＝写真）は、先ごろ町内で「ホタル鑑賞のタベ」を開いた。これは五年前から続けられているもので、『中日新聞』（東海本社＝浜松市）は「中・東遠版」でこれを取り上げ、ホタルの会の活動と「光の乱舞に夢を託す」市川会長の情熱を紹介した。

新聞記事によると、「今年はゲンジボタルが飛ぶのが少なかった」と生息状態を心配する市川さんの話を冒頭に掲げ、「同会が休耕田七百平方メートルを借りて、ホタルが生息しやすい環境を人工的に作った『ホタルの里・夢パーク』に、二年前から会員たちが増殖してふ化させた幼虫やえさのカワニナを放流。昨年は二百匹以上のゲンジボタルが飛び交う光景が見られたが、今年飛んだのはほんのわずかで残念だった。それというのも、今年は幼虫を新しく放流せず、自然の力に任せきったことが原因だった」。

市川さんは「やはりまだホタルのふ化は、人工的に手を加えなければだめですね。自然そのものがホタルが生きていけるような環境に回復していません」と、〝ホタルの里〟を取り戻す難しさをあらためて痛感している。来年こそは従来の人工ふ化に新たな工夫を加え、町の子どもたちが待ちこがれるゲンジボタルの乱舞に、市川さんは意欲を燃やしている。

理容業を営む市川さんは、教会役員。さらに「豊田ホタルの会会長」を務めながら特別養護老人ホームや身体障害者施設での散髪ひのきしんのほか、目の不自由な人のガイドヘルパー、朗読奉仕に従事。また、献血もすでに二百回を超えるなど、その活動は多岐にわたり町の話題となっている。（静岡・西尾社友情報提供）

マスコミに見る教友

『中日新聞』と『静岡新聞』が紹介

静岡の市川勝己さん

静岡県磐田郡豊田町の市川勝己さん（61歳・新龍東分教会教人）が会長を務めている「豊田ホタルの会」は3月17日、同町豊田の「ホタルの里夢

「ホタルの里夢パーク」に幼虫放流

パーク」の水路にゲンジボタルの幼虫約300匹を放流した。地元紙『中日新聞』（東海本社・浜松市）と『静岡新聞』（本社・静岡市）は3月18日付の紙面で市川さんらの活動を紹介した。

記事では「同会は7年前にホタルの飛び交う町を取り戻そうと、住民有志が結成した。会員25人は、休耕田だった土地を利用して約700平方メートルのホタルの里夢パークを作るなど、ホタルが過ごしやすい環境づくりに努めている」とこれまでの活動を紹介。

次いで今回の動きについて伝え、「この日は昨年7月に孵化（ふか）した幼虫を、会員が自宅でカワニナを与えるなど8カ月かけて育て、体長3センチほどに成長したところで水路に放流した」「幼虫は3月末には水路から陸上に上がり、さなぎとして1カ月半ほど土中に。5月中旬ごろには、空を飛ぶ姿を見ることができるといい、市川さんは元気良く育ってほしいと願いを込めた」と記している。

市川さんは現在、理髪店を営む一方、新一龍布教所長を務めている。

（山名大・西尾社友）

立教180年（平成29年/2017年）6月4日号

時報手配り10年

リポート

〝つながり〟の現場から

（その3）

〝心配り〟も時報に添えて

毎週金曜日、静岡県磐田市で理髪店を営む市川勝己さん（76歳・新龍東分教会新一龍布教所長）のもとへ、手配り用の『天理時報』十数部と〝手作り弁当〟が届けられる。

これらを届けているのは、中遠支部（夏目歳継支部長）内の手配り拠点長を務める鈴木孝幸さん（68歳・山八分教会前会長）。市川さん宅を訪ねた際には、互いの近況を報告し合い、信仰談議に花を咲かせている。

5年前に妻の恵美子さんが出直して以来、一人暮らしをしている市川さん。「鈴木さんの奥さんが作ってくださるお弁当には、煮物や揚げ物など〝ひと手間〟かかっているものがたくさん入っている。一人ではなかなか料理もできないので、本当にありがたい」と話す。

鈴木さんは「同じ地域に住む者同士、『少しでもお役に立てたら』と思ってお届けしている。ささやかな、たすけ合いです」と笑顔を見せる。

◇

同支部が手配り活動をスタートさせたのは11年前。鈴木さんは「地域の教友と信仰的なつながりを持ちたい」と、当初から手配りひのきしんに携わってきた。

現在の手配り率は86パーセントに上る。地域のようぼくネットワークが構築されていく中で、さまざまな動きが起きているという。

手配りきっかけに支部行事が活性化

以前から市川さんは、理髪店のお客さんに『いきいき通信』（天理時報特別号）を手渡したり、教えの一端を話したりするなど、にをいがけに努めてきた。

さらに、手配りひのきしんを始めてからは、鈴木さんに誘われて「浜名湖ガーデンパーク」（浜松市）での花壇管理のひのきしんにも参加するようになり、現在では中心的な役割を担っている。

また、鈴木さんに促されて理髪店や近所の公共施設を会場に年1、2回「陽気ぐらし講座」を開催するように。受講者の中には、手配りを通じて知り合った他系統の教友も少なくない。

「鈴木さんは手配りの際に、お弁当を届けるだけでなく、いつも〝心配り〟もしてくださる。そのおかげで、ひのきしんに参加したり、『陽気ぐらし講座』を開いたりするようになった。以前よりも顔なじみの教友が増えた」と笑み浮かべる。

◇

支部内には、鈴木さんに声をかけられて手配りを始めた教友が少なからずいる。青木忠雄さん（86歳・中瀬分教会長・磐田市）も、その一人。「手配り先で教友の方と話す機会があると、心が和む」と手配りひのきしんの喜びを語る。

青木さんは3年前に「耳下腺がん」と診断され、手配りを一時中断。その後、手術が成功して体調が回復し、手配りを再スタートした。腰にも身上を抱えるなか、信仰の喜びを胸に、5軒の教友宅を徒歩で回っている。

◇

支部手配り責任者の萩田伊津夫さん（69歳・和田岡分教会長）は「教友たちが勇んで手配りひのきしんに励んでくださるおかげで、徐々にではあるが、ようぼくネットワークが出来つつある。支部では、花壇管理のほかに介護施設の清掃などのひのきしんをしているが、あらためて声をかけなくても、手配りの際に添える『支部報』を見て、多くの教友が参加してくださる。これからも手配り網を生かして、支部活動を活性化させていきたい」と話した。

以上 7 ページ